

容貌論

橋爪大三郎

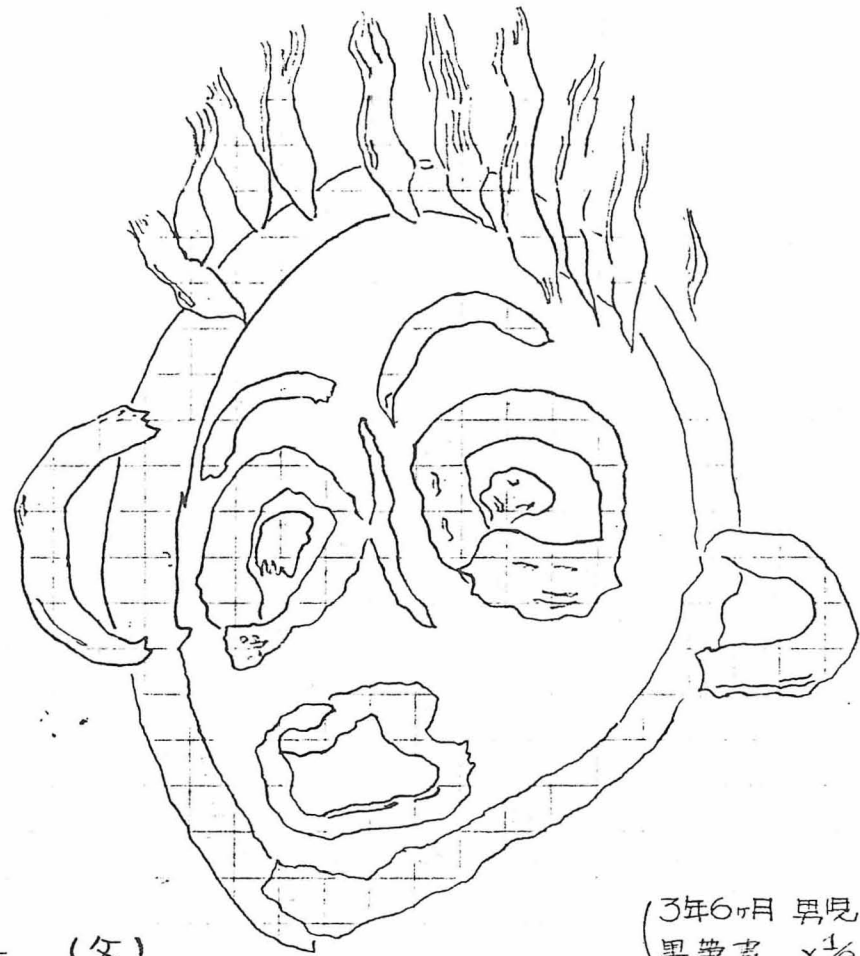


Fig. 1 (父)

(3年6月 男児)
(墨筆画 × 1/2)

0

対人的な状況のなかで、身体は、不可避免地、ある両義的 ambiguous なあり方を有する。この両義性は、人間が、いわゆる 2重の現実性 double reality を生きるほかならぬ事情に、出来ずるものであるだろう。2重の現実性それ自体のほりたちについては、また改めて別に論ずる機会をもうけることとし、ここでは、容貌を究明の主題としながら、各自の身体が、その両義性のもとで、相互にどのようなかかひりあいを営むのかについて、ごくごくかんたんて考えてみることにしよう。

1

人間が容貌(かお)をもっているように、他の動物たちもまた彼らのかおをもっている。といえるであろうか？ なるほど、頭部をもち、その前面をもつような動物種は、みなそれとのかおをなぞっているようにも、思われるかもしれない。魚類以下哺乳類に至るまでの脊椎動物のすべてがそうであるほか、昆虫類や頭足類そのほかの動物が、こうした条件に合致している。(タコ、イカのようない頭足類の場合には、腹部と胸部との中間に頭部が位置するが、その頭部の「前面」を、游泳中の進行方向によってではなく、口孔や眼球の開かれである方向によって定義するとすれば、上のように言うことになる。)。

かおを構成する重要な要素は、口と眼とであるが、とりわけ本質的なのは眼である。と云ってよからう。というのは、口を介して行なう摂食行動は、個体をそれ自身の再生産へと向かわせてしまうのに対し、いまいっほの眼球——視覚的な受容器——は、個体が、他のかおをそれとみとめ、自らのかおをそれとみとめさせ、互いが互いをみとめていることをもみとめあうようになるために、(さし

あたり) 必須の器官なのであるから。

眼球とよなまたさまざまの動物種にあって、眼球は、このような対地的な相互性のための器官なのであるか？

たとえば、ネコといったような動物は、われわれと類同のかみをもっているかのように、信ぜられるかもしれない。たしかに、ネコは、われわれによく似たかみだちをしている。(進化論の前提にたつまでもなく、哺乳動物の頭部は、一連の位相的変形 topological transformation によって、えられるは方であるから。) しかし、これは、ネコにかみをみとめるわれわれの側で、そうみているだけにはおきない、とすべきであって、実際ネコが、われわれの考えるようなみで、かみを体験している、というわけではない。容貌というとき、われわれがおもひえがいていいるのは、単にそこにあるようなかみ、なのでなく、むしろ、視られることによ、はじめそこにあらわれこくるようなかみ、心的過程を経て構成されてあるようなかみ、であるのだ。

それゆえ、われわれは、つぎのような概念的な区別を、算入しておくべきなのである——まず、物理的、生理的、ないし解剖学的にとらえられるような、かみの実在相を、顔[○]ということにする。また、そのような顔にかゝゆる諒解作用[○]を通じて、心的に構成された身体像ないし身体図式のことを、容貌[○]ということにする。この容貌論が明らかにしようとする容貌とは、さしあたり、視覚というひとつより遠隔的な(すなわち、光線を刺激源とする)受容器のはたらきを前提として成り立っているような、ゲシュタルト的な被構成体にはかならない。

N.B. 容貌を、このように定義してみるならば、盲人の場合には、ここに書かれているみでの容貌が成立していると言えなくなるのが、当然である。しかし、盲人はまた、盲人に特異な身体性[○]にもついて、盲人の対人的世界に構みである。ここでは、盲人のあかいる対人的状況は、どのような身体の相互性によって、いかに成り立っているか？ そのような盲人にあらわされる自/他の身体像[○]ないし身体図式[○]を、(広義の)

容貌とみるならば、それはどのようなものであるか？——この点は、興味深いテーマであるが、たらい余程もないので、ここではまったく留保しておくことにしよう。

2

われわれは、容貌に関して、それほど多くの事柄を扱うには、及ばないだろう。しかし、いくつかの論点に関しては、とりあがる以上、それを、あたうる限り綿密に追究しようとするのは、むしろである。

容貌に関して基本的と思われるいくつかの仮設的な立言をのべ、そのことによって、容貌をとらえる際の基本的な構図を、ここであらかじめ明らかにしておく方が、よいであろう。

容貌は、おどにのべたように、(さしあたりは他者の)顔に関して描かれるところの、身体像(心的形象)である。ところで、容貌は、そのほかの身体像一般に比して、きわめて特異なあり方を示すものだ、と言えよう。それは、いったい、どのように特異であるのだろうか？ ゆたしのみるところ、それは、つぎのようだ——人は、自分の容貌を、決して(真の)みで)視ることができないが、それにもかかわらぬ、その容貌において自らか他者に対してあることを熟知しており、そのような構えにおいて、対人的状況のなかでふるまうことをする。そのため、容貌という人間的な事象は、その分裂的なふたつの契機——一方では、容貌は、外からみられるところにおいだけ成立し、もう一方では、容貌は、決して視られることのないまま内から形づくられる——の統合においてしか、ありえないことになる。自己の容貌は、自身に対してではなく、直接他者に対してだけだされであることなしには成立しないうような、自己の身体図式なのである。そのようなみで、顔身体性の領域へと個体を推しやるような体験でありうるのだ。自明にみられているかみに見える容貌的世界の奥底にひそむ、容貌のこのような矛盾した分裂的なあ

り方をいっつめていくことが、さしあたって、われわれの作業目標である。

3

容貌という事象をこのようにとらえることに、何程かの根拠を見つけることができるだろうか？ おそらく、つぎのような一連の事象を首尾よく切りわけることができるならば、その有力な傍証をえたことになるのかもしれない——まず、容貌の各契機が分離した場合として、「かお」に関与する諸形態が派生していること。人物のかおの描画など、一般に、容貌を表現する図象の諸形態は、容貌を構成する外的な契機に照応する、といえよう。さらに、容貌の外的契機だけが切りはなされて、対人的な状況のなかで実現されるような場合として、仮面の一系列を考へることができる、と思われる。実際人が仮面をつけるのは、もちろん、向か特別の場合に限られるであろうが、なぜそうした特定の場合に仮面が必要とされるのか、また、それは、仮面のどのようなはたらきにもとづくのか、といった諸点は、容貌論（の延長）において論ずべきものである。

容貌の内的契機は、それ自体として形象のなかにとりだすというわけにはいかないのである。描画や仮面と同じような仕方での存在を証拠たてることは、できない。しかし、ギャクに、容貌がその内的契機を欠落する場合、たとえば、先天性盲人の「かお」であるとか、ある種の精神障碍時におけるような、容貌の解体であるとかをとりあげ、系統的な考察を加えてみるならば、容貌のなりたちとこの方面から考へなおしていくことも、できるだろう。つまりとこそ、容貌がこのようなあり方を示すのは、人が、社会において、2重の現実性を生きるほかはないことに、深く根ざしている、と考へなければならぬ——

本論では、以上のべたような諸点にざっと触れるようにして、容貌という社会的事象のなりたちを、いろいろと考へていくこととし

よう。

4

容貌が、人間の対人的な経験に“つきもの”であるとするれば、それは、どのように始まるのか？

幼児心理学の知見によれば、人間は、きわめて早い時期から、他者の容貌に対する志向的な関心によって、知覚を通路づけられるもののようである。ある時期以降の新生児は、人間のかおに対して、のみならず、眼球様の模様を2個模位置に並べただけのような図象に対しても、他の図象や図象を提示された場合をはるかに上回る、特に積極的な反応を示すものであるらしい。このような実験的事実からみるならば、人がとりわけ容貌を知覚するはたらきは、まったく後天的に開発される、ある性向である、というよりも、いくぶんは先天的に態勢づけられたものである可能性がある、と言えらるかもしれない。——いずれにせよ、人間が社会的な生活を開始していく能力と、この容貌への関心とが、密接不可分に結びあっていることは、たしかなものであるが。

5

幼児のなかで、他者の顔の知覚像が、徐々にどのように形成されてくるのかは、当の幼児の心的過程はいしは心的世界に属することからであるので、それをそれ自体として論ずるには、困難が伴う（あるいは、殆ど不可能である、と言った方がよい）。これは、幼児の言語獲得にも似た過程なのだから。

そこで、類推の準拠すべきは、先天性全盲者が、中途で開眼したような場合であるかもしれない。彼ら自身の報告は、はじめ光と色彩の溜としか見えなかったところから、しだいにものものかげとかたちがあるらしきはじめ、それらがやがてひとつの視空間へと凝結

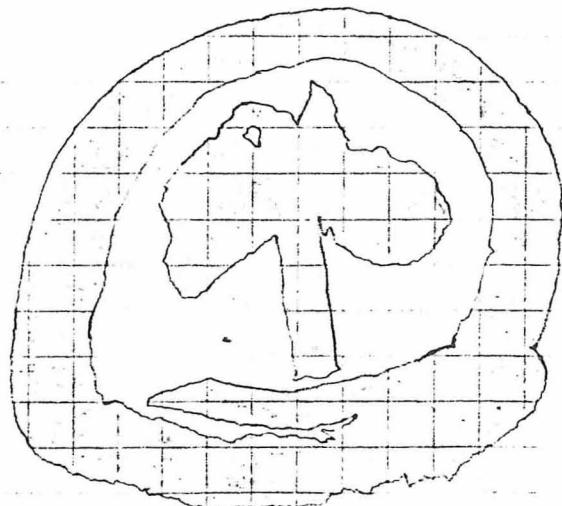
し、世界の相貌として定着していくまでの次第について、おおよその心像をつかむようにさせてくれる。ただ、その報告がどれほど正確なものでありえたとしても、容貌の成立に関するわけわけの推論に、ある程度以上蓋するところがないのは、やむをえない。なぜなら、それが、すでに言語を手に入れた、充分社会的な自己形成をへた個体の経験に関するものだから、である。(この経験が言語によって報告されること自身、すでにそのアザリアを証示している) この経験は、視覚的な形象が、すでに了解されていた「あい」だ、というように、結びつけられることから、なりたつ。生いっこの盲人が、「もし眼がみえるなら、どうしても見てみたいと思うもの」として、しばしばハビを真先きにあげるというのも、こうした事情とひとつである——ハビは、すでに、ある概念的な対象としてつかまれている、ただ、その適切な視覚像が欠けているのだ。(もちろん、肉親のかおも、そのリストの筆蹟にあげられることは、まちがいない。) 之れに対して、幼児における容貌(ないし視空間)の成立は、全体として同時に生成しつつある世界——身体性の分節/統合図式——との、作用-反作用的な相互形成関係を抜きにしては、語ることはできないのである。

6

容貌が充分成立する
とは、単に、人間の顔

Fig. 2 (無題)

(2年9ヶ月 女児(a))
(墨筆画 × 1/1)



一般を他の対象から区別して之れと識別したりすることをいうのではなく、個々の人顔個体の同定と識別とを可能とするような、客観的世界が、充分成立することを、含意している。ところで、このような容貌の成立は、わけわけが想像しがらみであるよりも、おっと遅い時期になるまで、なかなか完了しないものらしい。犯人を目撃した場合などの幼児の証言を、法廷で証拠として採用すべきなのかどうか、あるいはまた、採用するとしても、それはほぼ何才以上からが適当か、について、しばしば論争がまきおこる。ある実験結果の示すところによれば、小学校低学年程度の学童でも、一般に、他者の容貌を之れ自身として認知することは、かなりできにくらしい。彼らは、帽子や襟巻などの装飾品の効果、制服効果、背景効果などによって、たやすく容貌の同定と識別が犯されてしまい、同一人物を別人と判定したり、別人を同一人物と認知したりして(まう)のである。もちろん、成人の場合であっても、つけ髪やかぶらなどの変装によって、あるいは記憶ちがいや「他人の空似」によって、人物の同定を誤ったりすることは、しばしばであるだろう、しかし、幼児や学童の場合に顕著であるのは、成人のこの種の、容貌之れ自身に加えられた変形にもとづく錯謔や偶然に類する錯接などは、区別され、之れより深い層に由来するような、一種の失認症 agnosia の如きものである。

7

ところで、容貌の成立が、このように長期にわたる発達過程としてたどられるのであるとすれば、わけわけは、容貌にかゝる幼児の表出の諸形態に注目することによって、生成途上の幼児の容貌的世界の内実と垣間みることが、できるかもしれない。わけわけが幼児の描画をとりあげるのは、そのような目算にもとづくものだ。

幼児の描画をとりあげると好都合であるのは、それが①自発的で、②普遍的な行為だ、といえるからである。

幼児の描画行為は、まったくの内発性にもとづいた自発的な行為として始まる、といつてよい。それは、教えられる始まるものではない。また、成人の場合がさうでありうるのとは異なつて、何らかの社会的強制、拘束、規約、等々に制約されて描像を構成しない。描画へと向かう動機にせよ、描画表現の様式にせよ、そうした制約からおおむね自由である。

幼児は、少くとも、成人の描画から影響をうけるようになるまでのあいだ、歴史・文化的に継承されてきた特定の画法とは一切無縁なところを、勝手に描画をおこなう。そこで、もし、このような幼児の構成する描像に、ある共通な特徴がみいだされるのならば、われわれは、それを、描画行為にあらわしたある人間的な普遍性であると解釈しても、かまわないだろうと思ふ。ここにいう普遍性とは、Chomsky のいう普遍文法の構想にみられるような、普遍性の概念をさす。

8

以下で、われわれは、幼児の描画を（もちろん、とくに容貌の描像を）とりあげて、幼児における容貌の（未）成立を考えたのであるが、それに関連して、あらかじめいくつか留意しておきたい点がある。

まず、（当然のことであるけれども）描画は、たとえさういふかのように稚拙でありまた初歩的なものであるとしても、かたちをひとつの図象表現なのであり、その限りでは、表現へと至る表出の構造を十分に具えている。容貌を描いた図象のなかに、描者の抱いた容貌の知覚像が投影されていることは、あまりにも明白だとしても、その知覚像がどのようなものであるのか、描像のなかからただちにとりだしてしらべることは、できない。描像は、容貌（の知覚像）それ自体ではなく、あくまでも、その表現なのだ。容貌（の知覚像）は、そのために、表出の過程のなかを不回避に一連の制約と変形と

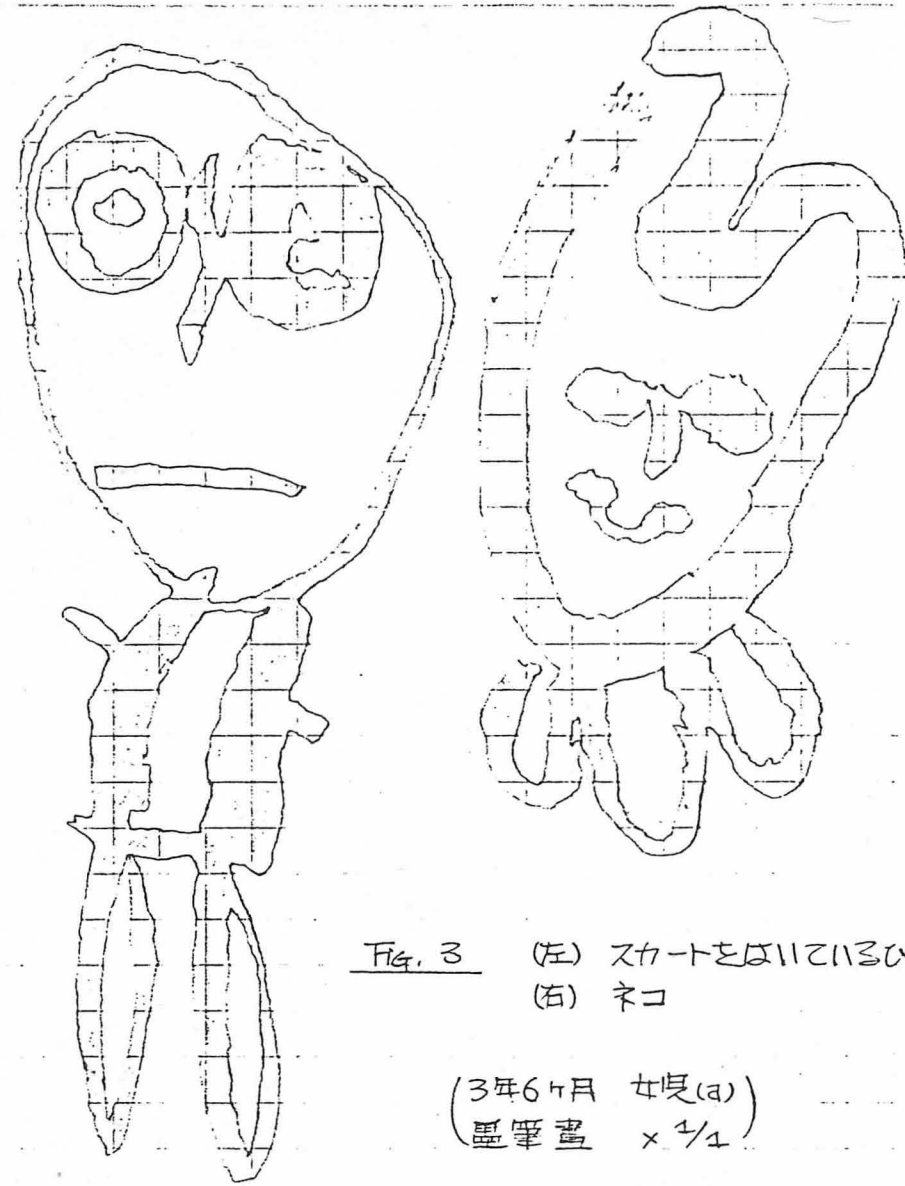


Fig. 3 (左) スカートをはいているひと
(右) ネコ

(3年6ヶ月 女児(a))
(墨筆画 × 1/4)

を被るほか居かたはあである。それゆえ、描画に関して発見され指摘されるさまがまの事実も、このような表出の構造を介してそこにあらわされてきたものと解釈され、割引かれぬはならない。あるいは、描像は、表出の位相において、つかまれないはならないのである。そのようにして、はじめ、描画の前提となる知覚像のあり様について、有効な説明を行なうことも可能となる。

第2に、描画行為と、描者の生きる容貌的世界との関係について、われわれは、描画を介して幼児の心的世界を溯行するとして、当

然のことながら、それを、描画行為の開始される以前にまで、たどりきることばできない。描画の展開をたどりることだけによつては、容貌的世界の展開をたどりつくすることは、できないはずである。というのも、一方での描画が、より複眼的な行為であり、ある発達段階に至つてはじめてあらゆるほかのにみまかす、しかも一方の容貌は、より単純な知覚体験に根ざしているため、容貌(の知覚像)の出現は、描画の開始にはるかに先立つてあるうから。実際、ゆいゆいが扱う幼児の描画も、かなり発達した知覚世界を描画がそなえていゝることを、うかがわせる。

9

さて、描画行為に際しては、一般に、つぎのようなる重の制約が伴う、と解しておくのがよからう——第1に、素材の制約、第2に、技能的制約、第3に、(固有の)表現の制約。

まず、素材の制約とは、描画を実現するための物質的手段——総じて画材——を支配し、規定する物的諸条件に属因するものをいう。この制約は、あらゆる描画に之の物的根拠を与える、一般的な制約であつて、何れとも、この制約をまぬかいることはない。(といゆえ、この一般的な制約のことを、ギャクに、描画の可能性とよんでもよい。)

この二つの制約が、いわゆる表出の構造を規定する、と考えられる。第2の、技能的制約とは、描画行為をなすための所作の形式のことをいう*。幼児の描画行為は、(さまざまないみせ)稚拙さがあるとみなされるだらうが、この稚拙さは、奈辺に由来するものであるうか? 幼児は、たしかに、身体の諸機能も、まだ充分に発達させていない——たとえば、鉛筆を手にとることがすでに困難であったり、成人であれば比較的容易な一連の動作を行なうことができなかったり、長時間にわたる集中と持続が不可能であったり、一定の描法に習熟するだけの経験をつむことが不可能であったり、する

だらう。しかし、ゆいゆいが幼児の描画をみていて気がかざるものはないのは、これらの描画を規定する制約が、こうした技能的制約によつては説明しつくされない、ある共通の特徴によつて、一様にいふことができる、という事実である。そのような特徴的な稚拙さがありうるすべし、それは、幼児の描画表現においてのみ普遍的に見出されるある表出の構造、おなやち、(固有の)表現にかかわる制約においてなのだ、と考えるほかない。あつてのべたが、幼児の場合、この(固有の)表現の制約は、成人の場合のような社会・文化的な制約ではなく、もっと基本的な制約なのだ。——つづめて言うならば、幼児の絵は、しばしば考えられがちであるような、「下手な」大人の絵、なのではない、それは、大人のものとほまた別のもの、その独自の秩序をもつもののように考察すべきものである。

* いわゆる技法は、ここでいう技能と区別される。技能は、純粹に身体的所作として発揮される技術をいひ、一方の技法は、素材の制約(=可能性)を活かしてひとつの常套的な表出手段へと高めようとする場合を、いふのだらう。

10

幼児心理学やその他のありうべき専門的文献を参照しないまま、以下、まったくのわたしの臆断に頼つて語らなければならぬのであるが——おそらくある時期、幼児の描画は、かならず、容貌をきりやめて定型的な仕方で描こうとするようなひとつの段階、概念絵画の時期とでも名づけらるべき1段階を、経過するであらう。

この段階が実際みとめられるとしても、それは、いまよりはじまるわけではない。それに先行するいくつかの段階を、当然考へておくべきである。

まず、描画に先立つ時期が、考えられねばならない。この時期には、たとえば、幼児が、「鉛筆を線を描いた」ようにみえたとしても、それは、「鉛筆を口にくわえてなめた」と等しい事態であり、偶然

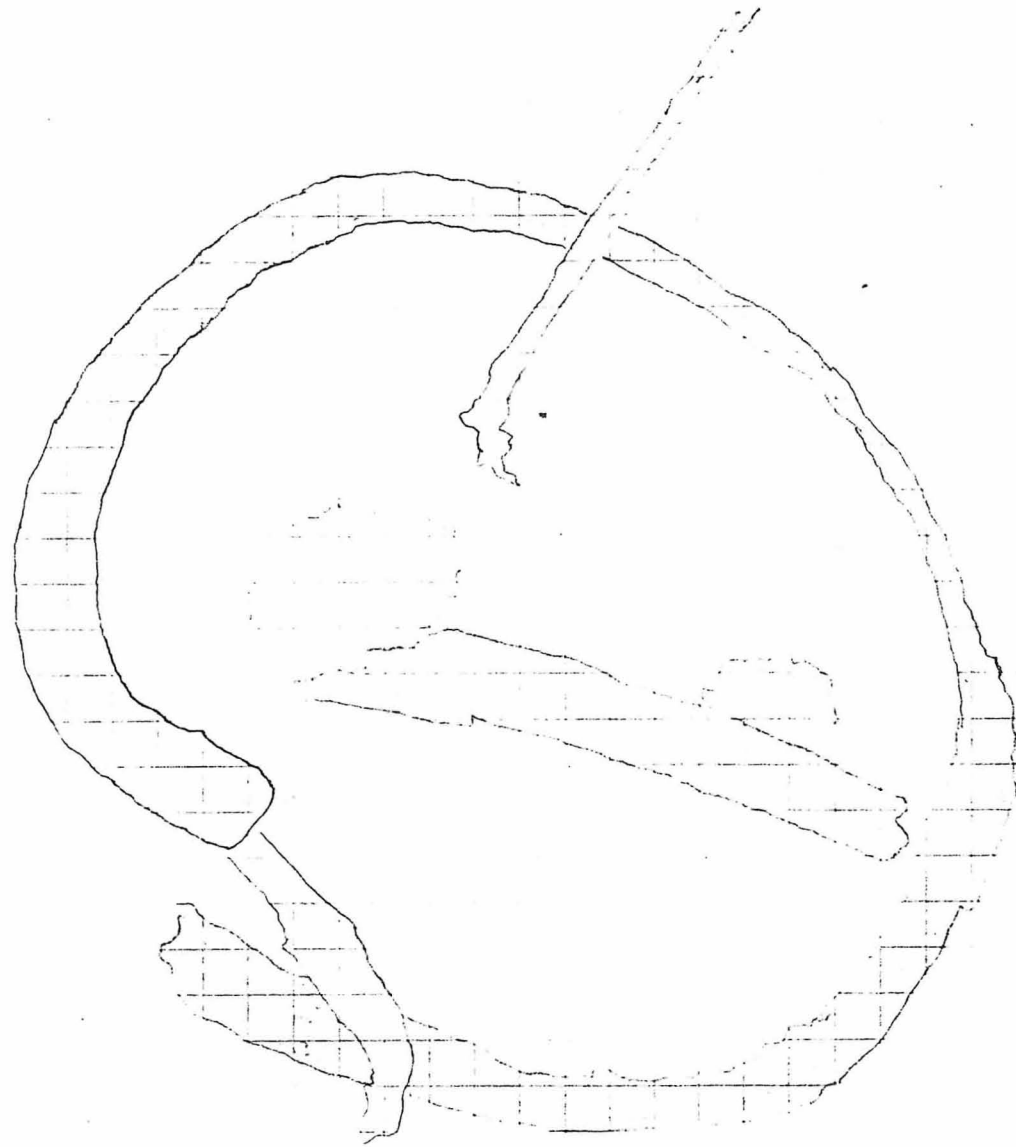


Fig. 4 OO (=自分の名)のお顔

(2年2ヶ月 女児ゆ)
(墨筆 盃 × 2/1)

の所産である。画材は、描画の素材として志向的な関心の対象となるのではなく、単に、物それ自身として、出逢われているにすぎないのである。

これに対し、同じく描像としては無秩序にみえながら、すでに描画行為の開始とみなしうるような、つぎの1段階が区別できるだろうと予想される。「描く」ということがどのようなことである

のか、すでに理解されかかっており、また、画材も、そのための志向的な関心の対象として明らかに配慮されておりながら、主として技能的な制約のために、描画行為の成立がまたげられているような段階である。

N.B. わたし自身のおぼろげな幼時記憶をたどってみよう——ある日、(おそらく満3才前後であたらしい)わたしは、兄弟たちといるときに、彼らから「ぬり絵」の1ページをさしだし、それを塗ってみるよと言われた。「ぬり絵」は、「自分で絵をかきわけはなからよくない」との理由で与えられたことがなかったから、これは兄弟が、どこかで手に入れたものをたどったのだらう。図柄は、4台のクルマであり、わたしは青と赤のクルマを1体塗った。わたしは、クルマが青緑色にぬり上がったところと、ありありと表象することができたので、事態はまったく容易だと思われた。わたしは、自分にもぬり絵ができるものと確信した。しかし、わたしがいざやってのけたことは——クルマの輪郭とは殆ど無関係に、乱雑きわまるジグザグの線を描きながらのことだった。この結果に、わたし自身、少なからず当惑させられた。わたしは、ただちに、ぬり絵もクルマもとりあげられ、そのぬり絵は、たいてい兄弟の手で仕上げられた。わたしは、小刻みに手を動かしながら空隙をうずめていく作業、そしてわたしはかしようとしたことだったのに、もう一度やらせてくれるには、とぞいとおぼろしいおもいでみても、いた——

ぬり絵は、あきらかに「出来」として意識されたために、わたしの記憶に外傷の如くに刻まれたものと思うが、この例から、一般の自発的な描画行為の場合についても、つぎのように言えるかもしれない——描画の技能的な制約のために、乱雑な描線のほかに、ひとつ明瞭な描像を構成できているようなときでも、すでにその行為が、表出の構造を内蔵しているような場合があるのではないか？

11

描画行為を描画行為として成立たせられているのは、ギリギリのところ、ある抽象性であると言わなければならない。このような抽象性

が、描像のいみを構成する。ある図象とみこといふような描像が、向ごとかの(たとえば、魚の)線だ、と言いうるのは、描像が、このような抽象性と背景とを有するような、表出の構造を具えている限りにおいて、なのだ。この抽象性は、さしあたり、ど人存ものでもよい——描首のいみだしの感情であるうと、描首の知覚像であるうと、描首の思想であるうと、かまゆない——のであるが、この抽象性は、表現をはなれてどこかに自存するようなものでは決してなくて、描像へと到る表出の構造がたどられることによつてようやくとい自らを示すことができるようなものである。といゆえ、先にあげた、描像を描像として実現できない描画行為の如きは、あくまで過渡的な1段階として区別できるとはぎない。当初圧倒的であるかにみえた技能的な制約が、描画の試みを反復するなかるとりのなかからいづれ、明瞭な図象をともなつた描像が、姿をあらわしてくる。

12

原始的な描画の段階とよぶことにしたいのは、これ以上漸りよのない単純な表出の構造をもつた描画の段階である。描画の図象は、ただ単に身体の律動を投影しただけのような打点の連続であるうと、あるいは、手の運動をなせるだけであるうとみえる、ある仕方で伸びまた屈曲する描線の交錯であるうと、かまゆない。

この段階の描画は、しばしば、いわゆる「抽象線画」と比較され、といと類同的なものとしての扱ひをうける場合すらある。しかし、見掛以上、そのようにみえる理由は、実のところ、おそろく、表出の構造が単純であることのためにしか、変わることはできない。この段階の描画行為は、表出と知覚の運動の回路——いったん表出された図象が、即再び知覚像としてとりこまれ、当初の描画の「企図」と照合された上、之に察知される不足を、描画行為のそのつぎの挙動へと繰り返すことのできるような回路——を欠いてゐるため、(たぶん)描像を具像的に結節してゆくことが、できないの

である。

13

表出と知覚の運動の回路は、描画の経験をつみかさねていくにつれ、徐々に形成されていく。

成人がまったく描画を行なれないでも「平気」でありうるのにみまかえ、幼児が、おしなべて、描画行為へと、ほとんど強迫的にさしむけられてゐるとすれば、それはどうしてか? 描画は、幼児の存在にひかく根を下ろしてあり、幼児の存在といはば不可分ののである。幼児にとつては、描画のような表現行為を遂行することは、己川の知覚の模態を練成しひとつの世界へと構成していく上でも、また、一連の(より抽象的な)概念が成立可能なことを確証し、自らの身体性に刻みつけて諒解するためにも——總じて、世界を、自らの身体の能動と受動との相関のもとでとらえ、世界を有意義な体系として創出してゆくために、必須の作業をなすであるう。このように、幼児が自己と世界とをかけたちがくってゆくための営為を、一般に遊戯とみることができようが、描画はそのなかでも重要な部分を占める。

14

表出と知覚の運動の回路がある程度にまで発達すると、描画は、自身の知覚像を、そのまま描像のかたちで定着させ、ひとつの図象へと構成することができるようになるだろう。(これが、おつうのいみでの、線といえるものである。) といは、誰かみてもたしかに、ある図象とみえる。"存子ほど、××の線だ"という諒解が、保証されるのだ。

この段階における幼児の描画が、とりわけ興味ひかくられるのは、といが、ちょうど形成されてゆくある自他の身体像や身体図式、

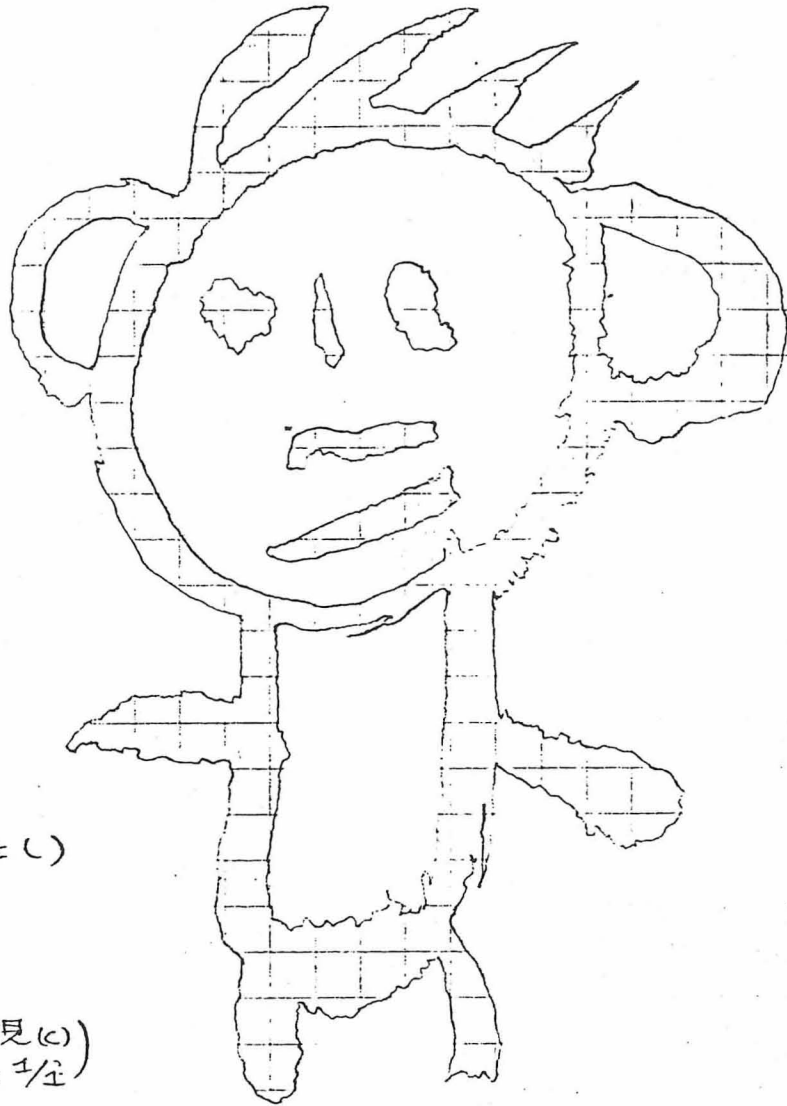


Fig. 5 (ゆたし)

(4年6月 女児(1))
(墨筆畫 × 1/2)

知覚の態勢などについて、うかがいしる手がかりを、ゆいゆいに与えてくれるからにはかならない。この1時期、幼児の描画の主題が、おに集中することは、たしかであるだろう。殊として、それは、常同的に反復されるほどだ。そして、これらの描像には、ある共通の形式的な特徴が見出されるように思われる。この特徴にかんがみ、ゆたしは、この時期を、少々乱暴な言い方になることを承知の上で、概色絵画の時期、として一括してみたい。

15

容貌を描きとろうとする場合にあらわゆる概色絵画の特徴を、以下にまとめてみよう*。要点は、つぎのようだ：

- ① 正面から描かれている(ように見える)こと、
- ② 容貌が、要素的に分解された構成素からなるものとして、描かれること、
- ③ 各種構成素の布置やその間の比率に、実尺からの位相的な変形を認めうること。

* 本当は、こうした作業をおこなうためには、手持ちの材質も、理論的な準備も、全く不足している(というより、それを通り越して、まったく無に等しい)のであるが、あえて試みるのは、データの隠蔽と錯綜とがあらわい以前に、解剖装置を捉えみるのも、順序として悪くない、と思われているからである。

① 容貌が横顔として描かれることは、まかない。ということば、正面からのかおとみえるものも、びつう考えられるような、正面からの描像であるとは、即ち、頭部を正面からみた場合の知覚像を表現しているとは、いえないのではなからうか？ 描画にあらわれている容貌は、正面から視野にとらえられた視覚像を写実的に再現するように構成されているわけでは、ない。むしろ、そのときどきによけとめられ、蓄積されてきた他者の容貌(身体像)が、全体として、描像のなかにもりこまれているのである。眼は、2つあるから、2つ描かれるのだ。かくして、容貌は、特定の表情を欠くことになる。

② また、容貌は、その構成素——眼、口、耳、鼻、輪郭線、髪髪——に分解され、これらの構成素を Gestalt として、図象化されている。(これらの要素のうち、最重要なものをあげれば、もちろん人眼であり、ついで口、輪郭線の順であるだろう。) このような分割には、言語のもちこんだ分節が、大いにあかかっているだろう。

こうして描かれたかおは、特定の顔であるというより、むしろ、かおなるものの概色を形象化したに近いのである。そのいみで、この描画を概色絵画とよぶならば、それは、特定の誰かの容貌を写し

たものであるとは言えぬ、概念としてとらえられた容顔の表現に
たなっていないうし、言えない。

描画が"誰と誰の像である"と称されたり意識されたりするこ
とは、ままたちがいないう。しかし、それは、描画に関して外的に
下さいる解釈であるか、あるいは、描画に先行するおぼろげな意図
の表明であるにすぎず、その描画の表出の構造を規定できているわ
けではないだろう。ある描像が"誰と誰のかお"になっている、と
言えるためには、描像の容顔を相互に区別するような示差が、そ
こに、多象的な表現として描きこまれているなければならないだろう。
概念絵画の段階では、能動と受動の回路は、なお、描かいつつある
画像と容顔の概念とをとり結んでいくにすぎないから、そのような
示差を画像の上に投影し定着させるだけの必然性を、その表出の構
造はとらえていないのである。

③概念絵画のいまひとつの特徴は、その容顔の歪み(ないし、ア
ンバランス)にあるといえよう。こゝが、技法としての「誇張」と
異なるのは、それが描画にとって自然な表現になっている、という
点にある。成人の眼がこうした描像に歪みを見とめうるのは、成人
が、実尺を伴った経験的世界(の像)を判断の基準とするからだか、
そう考えれば、この歪みが向によってもたらされるのかは、
判明である、と言えるだろう。概念絵画において、容顔の各要素に
与えられる相対的な比重は、身体像が容顔として読解される仕方と
度合を反映する、と考えられる。胴体その他が無視される(あるいは、
描かいたとしても、とてもしない)こと、容顔のなかでは、眼
が最も大きく、細部は全く無視されること、なども、そのような理
由に由来する。 (画像が描かれた順序も、おそらく、この点に密接
な関係をもつるはずであろうが、完成した描像からその経緯や影響
の度合を推しはかることは、残念ながらきわめてむづかしいので、
この点については留保しておく。

幼児の描画は、概念絵画の時期を経たのち、どのように展開する
のか？

こゝも、臆断にめぐりこのべれば、概念絵画のつぎの段階には、
おそらく、観念絵画とでも名づけられるような、1段階がある。こ
の時期には、①描画の主題が多様化し、それと同時に、②画面の空
間的な構成があらわれてくる、と言えよう。

④人物のほか、動物、乗物、家、花、……とさまざまな対象が
描かれるようになり、その描像も、いっとう細部の具体性を帯びて
くる、しかも、②そのような対象がいくつかがあつまり、ひとつの
画面を構成するように、描かれるようになるのだが、終つて、"こゝは
××をしているところ"というような読解の構図全体を表現するこ
うな表出の構造をもたえている段階だ、といえるだろう。描像の構
成や画面内部の位置関係は、描画の認知構造を反映するように組み
たてられるので、成人には、この時期の画像は、主観的に感じまげ
らいた世界像として映らざるをえない。このような描像は、描画の
願望にもとづく描像との自己同一化を主題とするようにみえるので、
観念絵画は、しばしば"幻想的"なものとみなされるが、おそらく
そのように考えるだけの根拠は見つけられないだろう、とわたしは
予想している。

観念絵画につづく段階は、写実絵画とよばれるかもしれない。

対象が写実的に描かれる、といえるためには、描画の表現をささ
ぐる能動-受動の回路がさらに分化をとげる結果、一回起的な対象
知覚経験の内容が描像の形象のうへに定着されるまでに、描像が特
定化されることを要する。こゝを実現するには、眼のはたらきが、
いわば^{主観的}に^{客観的}に描かれるべきである——眼は、描かいつつある描像
のほか、(記憶によってであれ、実際その場でであれ)描像の現

率となる像を、みているのである。とりわけ、現にえている視覚像を描画の基準として、それと描像とのあいだを視線が往復するときには、描画行為は、写生的なあり方をしていることになる。

画像がどのようなあいば写実的であるか否かに対して、アリアオリで一義的な基準は存在しない、むしろ、それぞれの社会に暗黙のうちにはけもたいしている理解が、これ以後の描画の展開の方向を規定するだろう。伝統的な社会のなかには、描画行為において、絵画と文様とが本来区別されない、連続的である場合、絵画の写実性がほとんど求められないような場合も、あると思われる。また、絵画が様式化されてあり、技能や技法の制約が写実性のある任方で固定してしまっているという場合も、少なくない。これらに比して、たまにまゆいゆいがそのうちにおかれている近代絵画の系譜は、きわめて特殊であるので、慎重に考えてかかる必要があるだろう。しかしここから先の議論は、描画論もしくは絵画論の固有領域なので、ここをこい以上足をのびしてみることはできない。

18

ここまでゆいゆいは、前描画期→(過渡期→)原初的描画期→概念絵画期→顔面絵画期→写実絵画期……とすすんでいくような、描画の一連の展開系列を設定して、その内実を考えたみてきた。この考察を肉付けし、客観のあらわいたついでさらに具体的に考えていくために、描画の実例(22~23頁, Fig. 6)をとりあげて、もうい々考えよう。

この2点の像は、4才余の女児がその両親を描いた(らしい)ものであるが、全体として、いくぶん概念絵画の特徵をのこしているものの、顔面絵画の段階(ないし、そのへの移行期)に属するものだ、と言えると思う——なせなら、並べ2描かれた二の両親の画像をば、①性別の対比が、写実的な形象をともなって、主題的に登場しており、しかも、②客観と他の身体部位との関係が、図像のなか

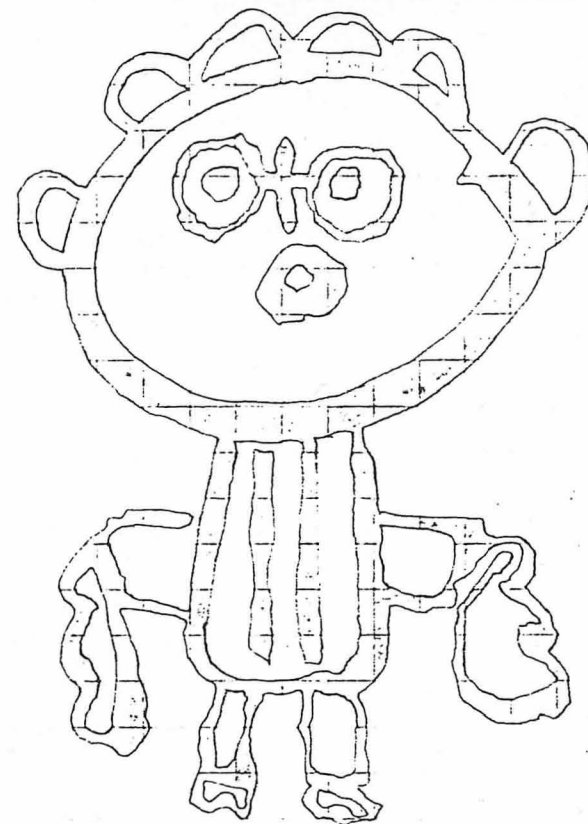


Fig. 6

(右 パパ)
(左 ママ)

(4年7ヶ月 女児C)
(墨筆画 × 1/2)

で明示され、それだけ体験の客観化(表現の高度化)が進行している、といえようから。それでも、この描像は、描者の客観のうけとめ方や身体図式のあり様を如実に示している、まがなかに興味ばかり。

父親(右)と母親(左)とが同じ様式の上に描かれていることは、一見して明らかである。父親の方がやや身長にかいてまっすぐなこと、父親が角ばった顔つきであるのに対して母親が丸顔であること、頭髪や着衣に差異があること、などは、いかいも、両親の実際の姿に対応している。しかし、これらは、偶然もしくは単なる概念的な区別に由来する、と解することもできる程度のものであり、総じてこの描画の写実性はそれほど高いとは言えない。(ほか、描者=女児Cの両親は、いかいも眼鏡を常用している。)

さらに、これら2つの描像が、いかなる身体図式を背景とするものが、考えよう。

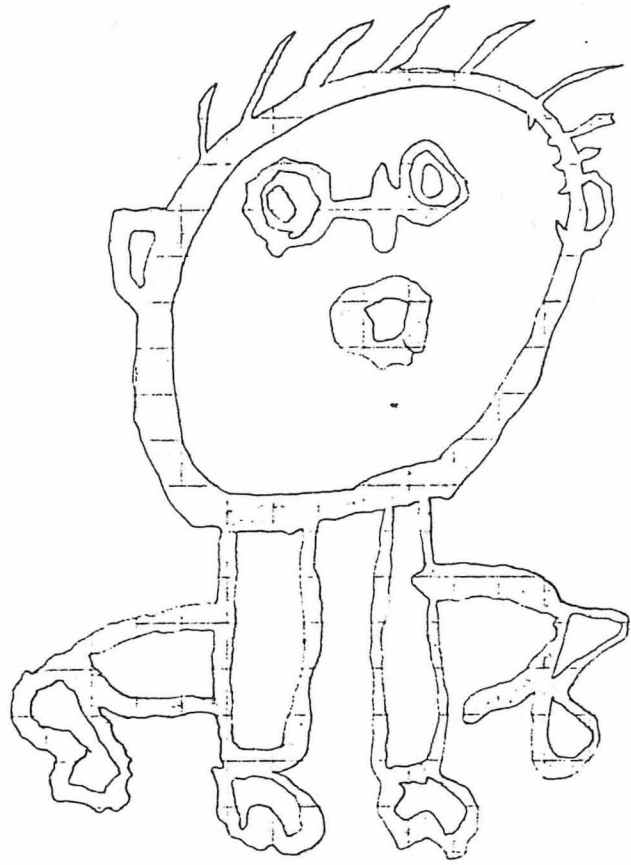


Fig. 6
(つぎ)

これらの描像は全身像であるが、それとしていくつかの注目すべき点をとらえてみる、としよう。まず、①からだ全体のなかで、かおの占める割合が、きわめて大きい。ついで、②手がきわめて大きな比率で描かれていること、③父親の胴体がなにか全く描かれていないこと、を挙げることができるだろう。

①いわゆる容顔と身体との不均衡に関しては、それらしい一連の理由づけが可能であるかにみえる、曰く、幼児は実際頭部が不均衡に大きいのである、曰く、立ったまま身体を見下ろすとき、胴や手足は少しも大きく見えないのだ、云々。しかしながら、すでに指摘しておいたように、描画の描線は、その表出の構造にまでひきもととして考えるのではない限り、その解釈を失うことになる。描像のなかで大きく描かれているのは、頭部ではなく、容顔なのだ。これらの描像は、全身の複眼的な像に対してその写実的な像を与えている

わけではないのだから、この不均衡がなにごとかの表現であるとみなければならぬ理由はない。

②手が異常に大きい理由も、基本的には、①でのバトと同じ事情にある。手は、身体のもっとも活発な運動器の先端であり、幼児では目下急激に開発されている部位なのである。

③父親は、なぜ胴体が描かれていないのであろうか？ 描者は、決して、父親の胴体を知覚できていないわけでは、ないだろう。(ほぼ同じ時期の描画に、胴体をとらえた父親像がある。) ただ、Fig. 6のようなGestaltは、偶然に生まれたものでもない。描者は、このころ、何回か、同じ図柄の描画をここらみている。

実情は、おそらく、つぎのようであるだろう——幼児にとり、父親の身体像は、わいわいの知るような身体図式に従う知覚像としていちどきに与えられる、というよりは、まがの各分肢毎に与えられる。すなわち、描者に笑いかける容顔として、描者に触れる手として、描者の眼前にとどりたつ2本の足として。前頁にみられる父親の奇妙な描像は、これらの知覚像をひとつの図象に統合するため、解決であるのだ。もちろん、このような構図を採用したために、身体図式は犠牲にされてしまう(あるいは、身体図式がまだ成熟をとげていないために、このようなことがおこった、と言ってもよい)。両の腕が脚の途中から生えているかの如き図象は、おそらく、描者当人もも当惑させたはずである。(これは、ちょうど、たとえば馬のうしろ肢をなかなかうまく描けなかったわいわいの当惑と、似たところがある。)

描像のなかで、身体図式がしばしばこのような崩れをみせるのに対し、容顔には、そのようなことがない。これは、容顔のほうが、いっそう基本的であること、描画のように身体の運動性の領域が展開するときには、すでに、容顔的な世界の構成がある水準以上に達しているからであろうと考えられる。

N.B. わいわいは何のこともなく、幼児の墨筆画ばかりを参照に依りて

もが、若干の注言をほどこしておこう。墨筆画は、単なる肖像描画とは異なり、描像の密度を濃くすることがたがひしいので、いさおい画像が単純なものであることを、強いらいる。一般に、描像が単純だからといって、決して如實像までもが単純であるとは言えないのは、明らかだ。単純な描像は、表出の描像が抽象的に作用としてはたらいた結果であるかもしれない。墨筆画の場合には、上述の素材の制約によつて、2. 単純化を強いられている可能性が大であるから、ゆいゆいは、描像から推論をたあめるにあつて、なお一層慎重にならなければならない。

19

幼児の描画を検討するなかで、ゆいゆいが知りえたのは、描きたる幼児がすでに根深く容貌的世界にとらわれてあること、あるいは、まづくに言へば、容貌的世界が成立するようにならなければならない、描画ははじめられないとみえること、であった。これをするとき、ゆいゆいは、つぎなる一連の核心的な問いへと、連れていかれることになる——容貌的世界（の住みたち）は、いかなるものか？ 容貌的世界が成立することが、なにゆえ、人間の社会生活によつて、不可避かつ重要な位置を占めることになるのか？

20

具体的な諸々の容貌が、全体として、ひとつの、対立のシステム *systeme des oppositions* をなす、と考へてみよう。

容貌には、2つの互いに直交する系列 *paradigme* が存在する。そのひとつは、表情の系列、すなわち、怒りの… / 悲しみの… / 喜びの… — 表情の排他的な対立であり、いまひとつは、適當なことばでないが、いふゆいは人相の系列、すなわち、各個体の（たとえば、A氏の… / B氏の… / C氏の…）容貌における同一性の、排他的な対立である。後者は、さらに、中間的な範疇を分、たとえば、老年

の… / 壮年の… / 青年の… / 少年の…、あるいは、男性の… / 女性の…、といった対立に、類型づけられるかもしれない。ゆいゆいが他者の容貌を適切に受けとめているのは、個々特定の容貌を、そのつど、このような系列の格子にあてがつて、解釈している限りにおいて、である。このような解釈を出發点とすればこそ、ゆいゆいは、ゆいゆいの対人的状況を、容貌の裏にかくさいた深さと複雑さとをなした対人的世界へと、組みあげていくことも適つのである。こうしておいて、はじめ、他者の容貌をそれとして瞭解したり、いみづけたりすることも、できることになる。

ところで、容貌解釈の系列を構成する2つの系列——表情の系列と人相の系列と——は、互いに独立に分節していくわけではない。一方の系列分節が成就しないいうちは、もう一方の系列の分節もまた成就しない、と考へべきである。なぜなら、両系列は、互いに他にかかわらない分節であるはずだから、だ。

幼児は、生後きゆめて早い時期から、他者の表情に対して活き活きと敏感に反応しはじめる、と考へていいだろう。それに対して、人相の系列の発達はいち遅れていく。（おまにのべたように、容貌に拘つて人物を同定する能力は、幼児がかなり成長したにして、おいそれと身につくものではないことを示す実験があつた。）ということは、人相を判別できない段階の幼児においては、容貌の表情もやはり、適切な仕方では読みとらえていないのではなから、という疑いを生ずる。

幼児が、他者を同定できないままに、容貌からその表情のみを読みとっているならば、その幼児の対人的世界は、表情によつて歪められて構成されてしまうだろう。もともと他者の同定には関与しないはずの、表情の分節ないし対立が、そのまま、対人的な空間に移しかえられ、染みついてしまう。たとえば、“こゆいおじさん”なるどのような、人物への投射が、すぐに行なわれてしまうだろうし、また、擬人化された動物たちのシステム（オオカミ / ヒツジ / ネコ / タヌキ / …）が、幼児の容貌的を思考に結びみやいのも、その

ためである。(動物たちの“容貌”を構成する示差は、本来、類を
之れとして固定するはずのものであるにもかかわらず、表情の如き
ものであると、解される——これは、神話的思差の特質でもあるの
だが。)

21

このような混淆につきまといながらも、容貌にかかわる読解力
は、対人的状況のなかで、またえられ、尖鋭にされてゆく。(ある
いは、対人的状況を社会関係へとつくりかえていく原動力が、容貌
を讀みとく力のなかに、かえって秘められているのだ、と言うべき
なのかも知れない。)人間は、容貌をひとつの Gestalt としてみて
とる力が、他の図象にくらべてもっとも大きいゆえに、たとえば「
顔グラフ」のような試みも、成立するのだ*。

* ある事象に関して、同時に観察するべきいくつかの指標のそれぞれを、
容貌をかたちづくる各構成要素(口、眼、眉、……)の形に、いったんおきか
え、その結果えられた表情を讀みとらせることにより、事象の全体的な性
格を印象的に把握せよ、という工夫が、顔グラフである。

対人的状況とは、中心のない(あるいは、いたるところが中心で
あるような)網であり、いつの時点においても、決して解きまられ
ることのないまま、うごめいて続いていく。この対人的状況を、あ
えてそのつど裁断して、そこにひとつの容貌的世界としての解釈を
与え、そのなかで自らを定位置してゆくことで、人は社会を生きはじ
める。

22

容貌的世界は、幼児の心的世界のなかで、徐々に熟成をとげてゆ
く。描画(概念絵画)は、そのために誰しも通り抜けなければなら
ない4段階であると言えらるるのだが、それと同じく、(いや、あ

るいみで、それ以上に)重要であるのは、人形である、と考えられ
る。人形、この、まったく己れの手許にある容貌的存在者の代理物
ほど、対人的状況の容貌的なあらわれと如実に示すものは、あるま
い。人形のかおだちは、あいまいなままに固定して成形されている
が、そのためかえて、幼児は、そこに任意の心的内容を讀みとる
ことができる。実は、それは、自身の心的内容を介称して、人形の
上に勝手に投射しているに、すぎないのであるが、幼児は、それを
逆に、所与の容貌から、ある心的内容を讀みとってそれに感応した
り、反撥したりするというさまがまな情動を経験しているかのよう
に、感ずる。人形とのこうした交渉が、作為にもとづくものであり、
人形とのあいだの、容貌を介する相互対称化関係も、見かけだおし
のものにすぎないことは、もちろん幼児にも熟知されている、いや、
それが判っていればこそ、幼児はこうした容貌的關係にのめりこむ
ことが、できるのだ。

現実の対人的状況は、決して己れの恣意に服さない、という点で、
人形的世界とはいちぢるしく喰いちがっている。こうした状況の困
難は、己れもまたひとつの容貌をもつて人々に立ちまじってゆく、
という社会的生の困難として、あらわれてくるだろう。自分の手許
におかれる人形の容貌は、その困難——自分の恣意にならない自分
の容貌を、ひきつけるまでの、うなぎのようなものであるかもしれ
ない。いずれ人は、そのような匿秘的な容貌的世界を、人形のたす
けをかりて演出しなければならぬというまでの必要性を、やがて
脱するようになる——もっとも、人によっては、人形が反れがかな
りのらの時期まで遷延することも、あるのだが。

23

その後、人がいかなる容貌的世界を生きていくか、という残りゆ
きも、決して平坦なものではない。まず、人が成熟した容貌的世界
に生きはじめようとする時期(たとえば、中学生期)に、容貌との

過度な自己同一視が、しばしば生ずる。その過剰がおさまると、本格的な美容と装身と化粧の段階が、開始される。(いわゆるの社会では、なぜか、主として女性の側に、容貌的に自己を形成するという後回りが、必ずあてられている) また、対人的状況とい自体が複雑をまじ、人が容貌からより多くの内容をよみとる力をつけるに応じて、人は、これに抗して、容貌からより多くを隠し(あるいは、隠す)、状況をより好都合にほごうとする種々の手筈を、あみだちようにならざるう。そしてまた、社会構造も、各自の容貌(というより、なく、容容風采)に、大きく影をおとし、さまざまの興味ある現象を惹起してくる。——これらを混同させることは、容貌に関する考察を定めし豊かにするであろうが、いわゆるはこれら個別の論点を、素通りするほがないのが残念だ。

24

個別的な議論をほない、容貌論の核心とは、つぎのような論点である——容貌的世界を生きることで、人は、どうして、社会へと不可避にさしこめられてあることにならぬのか(、あるいは、社会へといは投げだされてしまうのか)?

ここで、まづ考えなければならぬのは、"己れが容貌的存在者である"という信念(ないし、自己覚解)の存りたちである。そこで見出されるのは、容貌の根源的な"間身体性"とでも言うべきものであるが、そのように解すれば、容貌こそ、かけぬがした、人間社会を成り立たせる原基である、と言っていい。

以下、いわゆるの作業のつじみらは、おおむね、つぎのようであるからう——(1)まづ、容貌が、いかに特異な事象であるかをさぐること。ついで、容貌的存在者としての自己の像を受容することが、ひとつの投企であること、ならびに、間身体性の概念を、2重のリアリティに即して、理解すること。容貌の両面性、ならびに、その分解が現象性の変容と相即あることを、明らかにすること。

と、かくして、容貌の成立と不成立とも、人間の根源的社会性との関係で、再把握すること。

25

まづ第1に確認しておきたいのは、人は、自分の容貌を、決して自分で見ることはできない、という事実である*。己れの容貌は、見る行為にとって、もうとも遠い対象であり、さながら、視空間にそなわける無限遠平面のようになが存在しない。2重の対面的な状況を考えればなら、両当事者の容貌がひとつの視空間のなかに映らねること、ありえないのである。それぞれの容貌は、決して交わることのない平行面のような仕方では、存在してない。この事実を反省してみると、自分に容貌が具わっている、という日常の確信の根拠を、改めて問ひなおしてみる必要に、いわゆるは気がかざるをえまい。

* もちろん、単に視えないということだけではない、音中や内用も同断であるが、ここで容貌が視えないといういは、さし本質的である。

また、鏡の如きものによって己れの容貌がつかまえるというわけのものでもない。鏡のなかに、他者のみか自己の容貌はなく(自己の容貌をよみとるとして)自己に向かう身体の映像が、みこえるだけだ。

ひとは言うかもしれない、だいにともかたがある、そんなことはあたりまえだ、と。あるいはみでは、たしかにそのとおりだ。いわゆるは、日常すに容貌的世界に生きている成人であり、しかも、鏡のような、自己の外貌を觀察するための装置が、いたるところにおかいてあるのだから。しかし、ある原住民が、記念撮影の写真のなかから自分だけを見つけることができなかったり、あるいは、ちでみたように、幼児において容貌が未成立であったり、という事実に目を向けるなら、いわゆるの批判をたてにとって、これをすまふことはできないのである。人が容貌をもつことが自明であるとは、すに成立してある容貌的世界の支離解の地盤の上に乗って、ほじ

めて言えることであるのだから。問題としたのは、その前提のなりたちと自身だ。

26

容貌は、もともと客体視が適わないため、自己の身体像の存かども、特異な位置を占めることに存するはずだ、というのが、わたしの主張点である。自分の手足ないし胴体は、容易にその視覚像とすることが出来るので、それを他者の身体像と規定することも、可能であるかもしれない。とあるが、自身に、つねに(また確実に)ひとつの容貌が存する、という確信は、ある種類の帰結である、という解釈も成立するように思われる。すると、要諦は、つぎのように要約できるように見える——

- (1) 各自は、容貌(顔の外観)を有している。
- (2) ただし、各自は、自己の容貌に関しては、それを視ることができない。
- (3) よって、容貌を介して互あはれる対人的状況は、つぎのようなゲームの様相を呈するだろう——各自は、自分の手札をみることはできないが、相手の手札をみることができ、そこから自分の手札を推量するようにしてプレイするゲームである。

誰にとっても、一様に、このような容貌的世界として、対人的状況が拓かれていることを、容貌の双称性 symmetry ということができるかもしれない*。

* のりこらばら——容貌の如く——が、ショットケンガであり、それが里の伝説世界において妖怪の列に加えられているのは、それが、かかる容貌の双称性を破壊する一種の超絶違反であり、面識社会の容貌的世界の土台をおびやかしていることが、酒がに危惧されているからにほかならぬ。

多分、自閉症 autism の概念を例外とすれば、幼児は、きわめて早くから、このような容貌的世界に生きはじめている。

27

容貌的世界の日常的な在り方は、厳密に種式され根拠づけられたわけではなから、厳密な思考は、無方法をまよそに依拠するゆえには、いなくなる。(たとえば、前節の命題(1)と(2)とは、いわゆる文法問題に接触し、Russelの逆理の如き矛盾を、かたちづくる。) 厳格な如であるとする近代哲学の系譜の存かども、むしろ、自己の容貌の(絶対的)不成立ないし非在が、帰結されてしまうことに、なりかねない。

L. Wittgenstein は、つぎのように言っている。

- 5.632 主体は世界に属する。それは世界の限界なのだ。
- 5.633 世界のどこに、形而上学的な主体がみとめられるのか。君は、眼と視野との関係とまったく同じ関係が、ここになりたつという。しかし君は、自分の眼を実際に見ていられるわけではない。
- よって、視界のうちにあるいかなるものからも、それが眼によって見られることは推論されない。
- 5.6331 あるいは、視野はたとえ第2図のごとき構造をもつものである。



》

(Wittgenstein [1921=1968:170], 藤田訳音。漢数字は下付セテ数字に改め) このような独我論 solipsicism は、過激であることにおいて、その思想的な境位を保っている。であるから、その内容が非常識であるとか、その帰結が信じがたいとかいうような指摘によるのでは、その思想を斥ける上で、何のたしにもならない。(仮せむら、日常的な思考や態度をきわどいと二つを成立させている、その実不徹底な曖昧さこそが、このような思想をうみだす当の土壌になっ

だから。)

独我論のような思想に反対し、これを破砕しようとするには、別な見方ひとつの、これと違背する徹底した思想をもってするより、ない。

28

世界は、眼でみられたものではない、と Wittgenstein は言っている。この証拠に、世界を見ている眼というものは、見えはしない——あるゆえに、(所知的な)世界には、能知的な主体は属していないのである。それは、知る主体は、どこにあるのか？ わたしのか人がえるところ、たぶん、つぎのような言い方があるまい——世界は自身、主体である、あるいは、眼は、もしそう言おうとすれば、世界は自身と同じ直径においてある、と。

さて、このように言うのであれば、世界のなかに自己の容貌が含まれるわけがないのは、あまりにも明らかである。顔面顔の運動知覚等を別にすれば、自らの外観(いわゆる容貌)は、自らに知りうるものではない(それゆえ、世界に属さない)のだから。自らの容貌は、もしあるのだとすれば、この世界のさらに向こう側に、その超越的な外観として、“ある”とでも言うしかないのである。その容貌とは、世界のなかでは、つらねられることのない「眼」を包むような、容貌、己の身体を他人に開くような容貌、という二つの間身体性へとさしつけられるような容貌、であるはずなのだ。

Wittgenstein の試みは、論理(のみ)によつて知を秩序づけることと、人がいかなる種類の危険(危難)にみまわれることとなるのかを、わかりやすく告げようとする点で、まことに興味ぶかく、それ自身としても追及しつめるだけの値打ちを有するが、ここでは察知して、ほんの特定の視角からだけ考えよう。Wittgenstein は、この世界が眼によつて見られるというだけの証拠がない、

と言ったとき、ほんの少々性急に過ぎたのではなからうか？ (あるいは、態度として、万全をなかつたとは言えないか？) 二二のわたしの態度は、こうである——日常の容貌的世界がどのようにして現に成り立っているのか、その機制に喜ばしないうだとして、十全を知を構成できたとは、言えまい。

N.B. ここから先の議論は、当然に、Wittgenstein の論じていることを前提として、彼のいう“眼”は身体的な眼のことでは、必ずしもなかったのだから。それゆえ、彼の“眼”はわたしの言うような容貌と、本来何の関係もない。わたしがあえてこれを“眼”に用いたのは、独我論的な図式によつて、現にある人間的な世界の構造をどうして再現できないことを示すためである。

29

(所知的な)世界のなかに自らの容貌が属さないといえれば、それは、容貌が、端的に言って、他者のものであるからだ。

自身の容貌は、たしかに、自身の身体(筋肉、皮膚、……)にもとづいていられるが、他者にさつとつかめとられてしまうような場合である。顔の筋肉は、随意筋からできているのだから、いつでも自分の思いどおりの表情を作ることになり、容貌を自分の手許にひきとめておけばよい、というふうには、考える人もいない。しかし、対面的な場面での応酬のなかで、自身の容貌は、そのどんな瞬間のくぐもりをさえ、己で意識するよりも速く、ただちに、あつと言ふまに他者に読みとられてしまうものなのだ。己の自身の思わぬ知らぬ顔面の動きを察知しては修正するという反省的努力は、対面的な場面でのびがう瞬発性とは比較にならぬほど、暇めかかる作業である。これではもとより勝負にならぬ。また、つねに自身の容貌を顧慮していることは、不自然であり、自然な対応のもとでは、不可能なことだ(そうして、”自分の容貌を顧慮しているところだ”という容貌を呈してしまう)。——つまりここ

3. 容貌は、まづ直接他者に晒すいてしまうしかないのだ。このような工夫も、その事情を(すっかり)くっがえすことはできない。人は、自身の容貌のなかに、つねに、11が人ともしがたく、もっとも赤裸に自身のあり方を扱がだしてしまっている。

このように人は、容貌において、己れも識りえないようなあり方で、己れが存在していること、あるいは、己れが容貌的存在であることも、知る。

30

人は、己れが容貌的存在であることも知り、己れの容貌をひきうけるとしても、それは直接にはではない。直接にたしかめられる事態とは、ひとつには、他者(の身体像)が、その容貌をとおして、うけとめられている。ということであり、もうひとつには、自身が他者には、容貌をとおしてうけとめられている、ということである。(ただ、後者は、結局のところやはり、他者の身体像を介してようやく知られることであるのは、たしかだ。) ここで、他者の容貌と自己の容貌とが、さしあたりまったく異なるものであることを、再確認しておく。前者は、視覚像であるのに対し、後者は、一連の運動知覚をよこめあげる身体図式である。視覚像であるような自己の容貌は、さしあたりひとつの観念たるにとどまる。

さて、つぎに、他者と他者の身体像とも、混同しないように留意しよう。わいりわいが他者について具体的に知りうることは、例外ないに、他者の身体像のかたちをやってくる。他者とのものは、自己の容貌がどうであったのと同じく、さしあたりひとつの観念たるにとどまるのだ。

他者の身体像は、(自己における)知覚像のひとつである。この他者の身体像を、あくまでも知覚像——自らの身体の一状態——としてとらえ、それらを自らの身体へとくくりこむようにしたときあらわれてくる現実性を、わたくしは、現象学的リアリティとよぶこと

にしよう。この現実性においては、他者の容貌は可能である(といは、自らの身体にあらわれたひとつの Gestalt である)としても、自らの容貌は、まったく可能でない(といは、自らの身体へとあらわれるものではない)*。

* 言までもないだろうが、ここでいう「自らの容貌」とは、顔面の運動知覚のことではなく、自らの外観(の知覚)のことだけを、さしいる。

31

他者の身体像が、知覚のありかた、あるいは、己れの身体の一状態であるにすぎぬ。という言い方は、しかし、あまり正確な言い方ではない。現象学的な現実性に基づけば、"他者が、まづ存在しており、しかるのちに、その身体像が、己れの身体に達している"などは、到底言えないはずだから、である。他者とは、己れの身体の状態の一連の変遷にも不変 invariant な対称として、おだに構成されている、ある実体のことだ。したがって、ある知覚ないし心的事態をとくに他と切りわけ、それを「他者の身体像」と名づけておけば、それは、先行するある統解の帰結としてしか、可能ではない、というよう。統解は、ひとつの構成作用であるかもしれないが、統解の特徴的な点は、いったん統解がなされたあとでは、それが構成作用の帰結であったことを忘れてしまうところにある。

32

統解作用は、(己れの)身体性の全域を分節/統合し、その一部分を他者の身体像として結露させるが、それと反動的 reflexive に、自己の身体像をも構成する。人は、そうして、身体性のなかから、自己と他者とを分称する。

このように結露した自己の身体像は、身体性の全域のなかで、ある種座標の原点の如くにはたらいて、諸々一連の現象を適宜振りわけ

け、それらを、時間・空間的な広がりをもたせた世界へと、整理すること、可能である。この世界のなかでは、自身の身体像と他者の身体像とは、ともに、互いに同等な自己と他者との像である、とみなされることになる——つまり、自己がかく自己像 self-into map をもつように、他者もまた自己像をもつはかなのだ。このような場合にはじめて、自身の容貌が可能になっている。なぜなら、世界は、自己像と他者像とからなる自身の身体性にはかたならないことが、露呈しているからだ。自身の自己像を原点として構成されたような世界は、ほ人の相対的なものである、とみなされる。この場合、すでに、自己と他者とをともにそこに存在させる基盤であるような、身体性をこえた実在の広がりか、考えられているであろう。このように、自己と他者とが同等に存在者としてみとられた場合の現実性のこと、ゆえに、唯物論的リアリティ とよぶことにする (Fig. 7 ~ Fig. 8 参照)。

33

諒解とは、何をどのように処理する仕方であるのか？ この問いに対して、いま、ゆいゆい、つぎのように対応することができよう——諒解とは、現に生起するべきことの全体を、その二重の現実性においことちえ、それと、像 image と逆像 inverse image とのあいだの対応へと、移しかえしてしまうこと、である。

人は、このような諒解作用を行おうという心的機能を、不断に発揮している。いわゆる身体性の分節/統合は、その受動的契機としてこの諒解作用を擁するのだが、他方、またその能動的契機として、表現=行為を擁する。こうした、能動-受動の回路を格別に移ぐくっていることで、人間(だけ)が社会を構成することが可能になっている。人が、容貌的世界を成立させ、そこで生きるようになるのも、対人的情況を色な事象の全体と、このような2重の現実性として、諒解がけることができたから、ほかたならない。よって、ゆい

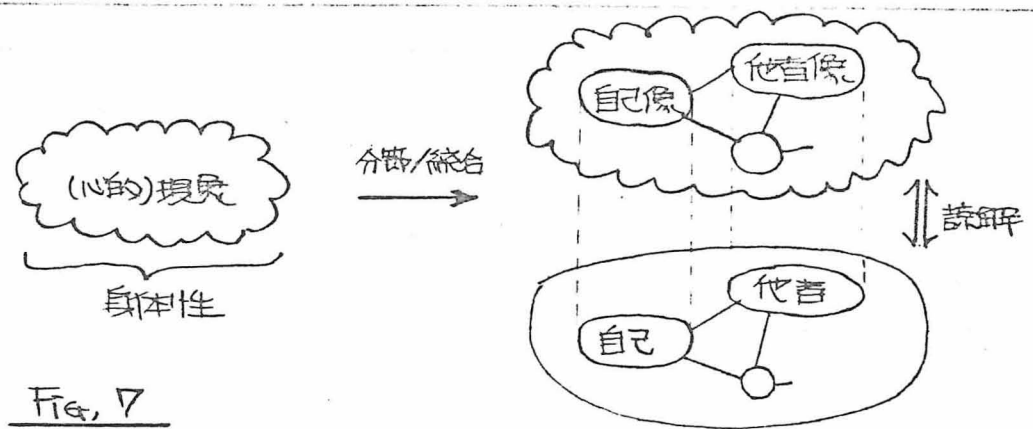


Fig. 7

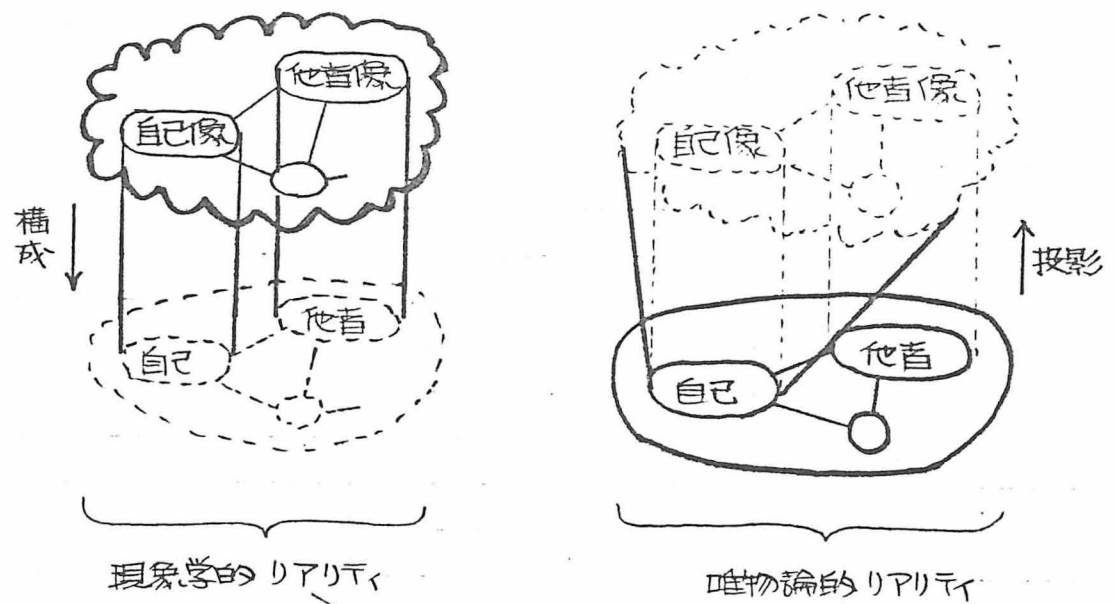


Fig. 8

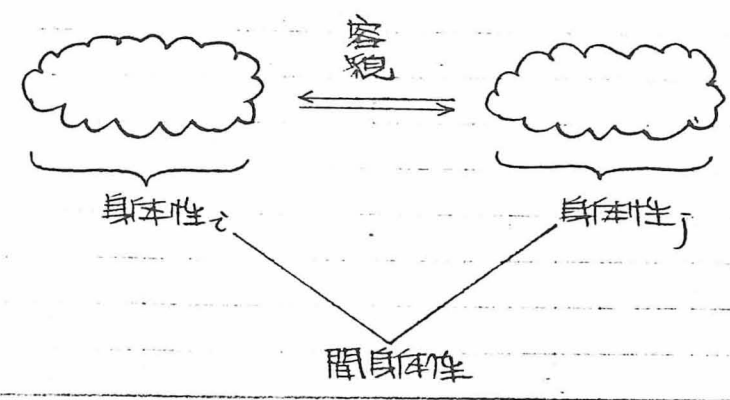


Fig. 9

われは、つぎのようによつてもいいだろう——(自らの)容貌は、
諒解において存在する、と。

34

人は、自らが容貌的存在者としてあることを知るようになるなら、
自身の容貌(外貌)に作為を加えることにより、自らの存在をか
えこしめる余地があることに、気づく。

容貌が、2つの系列の交叉する格子によつて解読されたように、
容貌にかゝる作為も、この2つの系列にぞつて生じうる。表情の
系列に即しては、つくり笑い、うそ泣き、猫かぶり、……等々の、
いろいろの表情の系列が位置を占め、人相の系列に即しては、化粧
術、変装術、整形術、……等々の、反同一性の系列が、位置を占め
ることになる。

容貌は、その外的契機と内的契機との矛盾を互に統一として、
あつた。もともと容貌は、顔の自然的な形状を土台とするものでは
あるが、これに對するに、容貌の可塑性 plasticity をあまりに強調す
るところに、まったく自在に容貌(的形像)を創出してしまおうと
するところみ——仮面 masque——が、成立する。仮面は、特定の
身体(=顔)をもたない、純粹の外貌であり、容貌の外的契機のみ
がかりはなさいて自居化したもの、と解しうるだろう。

35

仮面がと存之ている造型的な特徴その他は、とりあげずに興味ぶ
かい題材であるものの、ここで言及する暇がない。われわれは、た
だひとつのこと、問うてみよう——仮面は、なにゆえに、非日常
的な空間を創出するだけの作用を及ぼすのか？

仮面の形状は、しばしば異形であり、かつ、不可思議なものである。
そのようなものを目撃したときに感じられる異化作用といふ自居

が、仮面にまつゆる非現実感の源であると説明しても、あるいはか
まゆたいのかもしれない。しかし、仮面が、顔面その他の容貌をか
たどる造形的な形像一般と区別さうするのは、実際、それが、ある
個体の顔面に装着され、その(代替的な)容貌と化して、ある具体
的な面接触的場面をかたちづくることにおいて、存のた。といゆえ、
仮面の「異常さ」も、このような対人的交渉のなかで、とらえられ
なければならぬ。

(すなわちいふが)仮面は、容貌の双極性を破砕するようにはた
らくので、その両側から、仮面の効果を考へてみる必要がある。一
方の側の体験は、仮面と出逢う体験であり、いま一方の側の体験と
は、仮面をつける体験である。

36

仮面と出逢うとは、何ごとか？ それは、(つぎの)2重のいみ
で、諒解ないし言表を絶する体験である。

まず、仮面は、真の容貌を遮蔽する、といういみで、容貌の諒解
をまったく不可能とする(すなわち、仮面をつけたその個体の固定
を行なうこともできなければ、その表情をよみとることも、できが
ぬる)。かような覆面効果にもかかわらず、己れ自身の容貌はとい
えば、他(仮面)に對して晒されたままであるのだが、この一方向
性は、いちぢるしい不安を、喚びさますずには、おかぬかもしない。

また、仮面(をつけた対称)を、それ自身ひとつの容貌的存在者
とみなすとしても、このような根本的な不安は、除かれまい。とい
うのは、仮面のあらゆるしてはる当の容貌は、純然たる造形的な形像
であるのだから、本来表情の系列を欠いてはる*。しかも、仮面の
容貌をそれとして固定しようとしても、(怒意的につくられた面が
存いといふは)共同社会においてはよく知られているかもしない
が、決して馴れみではない(すなわち、かゝる誰も身体の至近距離

にあつたばかりでない)人物でしか居らうから。仮面をみて、たとへば、"天狗だ"と固定したとしても、それどころかということもない。

* しばしば言われるように、古い仮面とは、容貌の写実性の度合の高いものというのではなく、むしろ、造形の不確定性、多様な不均衡を含むおもしろいものである。このような仮面は、さまざまな角度や背景や所作との結合によつて、そのつと異なる複像をみるものとす。全体として、表情の系列にも似た一連の顔みを、可能とせしめるのである。

仮面をつけた他者とというのは、このように、身体をもつてそこに現存してゐるにもかゝららず、西義的にしか対峙化できないようなあまいさ(判りがたさ)をもちこける。(このようなあまいさは、いわゆる演劇的な situation に現にある個体を前にする場合にうける印象とも、共通してゐる。)このあまいさは、"××なる人物が△△なる面をつけてゐるのだ"と読解して見たとしても、いささかも解消できはしない。ただ、仮面に出逢ふという体験は、つまるところ、容貌的他者を読解する圧力が脅かされ、そのような他者と対峙関係にある限りでの自さが脅かされたにすぎず、なお容貌的存在者としての己れのあり方自体にまで亀裂が及んでゐるとはみなしがたい。

37

これに対し、仮面をつけるとは、いかなることであるのか?

この体験は、仮面に出逢ふ場合と、ちょうど裏返しになつてゐるだけのように思われるかもしれないが、事態は、じつははるかに二重にこける、というのは、仮面をゆぶゆぶつけるほどの個体は、仮面をつけてからどのようにふるまうかに関し、一定の準備と計画とを用意してゐるのだ、ちがひなからうから。その辺の事情をこころで考慮してゐるだけの羊間ばかりではないので、この論点は割愛し、先にすすもう。

仮面をつけるという行為は、個体に、深刻な分裂をもちこける。まだ仮面をつけないでゐる個体は、その仮面があらゆる容貌的存在者は、個体とは別にある。個体は、仮面のあらゆる容貌を、手にとつて見ることができるし、仮面のあらゆる人物にまぎれる話を、聞いたつもりもしたばかりなのだ。たしかに、それはまだそこにある。しかし、仮面をつけると同時に、2つのことがおこる——まづ、一方では、仮面の容貌は、なくなつてしまひ(すなわち、なくなることに、自らの容貌ととつてかへつてしまひ)、己れと区別されてあるとは言えなくなつてしまふ。そして、もう一方では、他の諸個体は、仮面に出逢ふことなしに、この個体に出逢ふことができなくなつてしまふ(仮面をつけた個体も、そのような諸個体を見出すしかなくなつてしまふ)。

仮面をつけた個体が体験するのは、対人的状況の全般的変容であるだろう。個体は、もちろんならぬ、仮面の元方のような容貌的存在者であらねばならぬ。そして個体は、演技のような一種の技術を駆使するか、儀礼的な定型を踏襲するか、心的喪失ないし忘我を経由するか、いずれによるにせよ、これをやりかかせるほかはない。個体は、己れの容貌(外貌)にひきまがらぬようにして、己れの存在をかたちづくつてゐる。(人が容貌的存在者であるとは、このようにならぬひきまがらぬを、各人でゐるのだ。)

38

仮面に出逢ふ、仮面をつける、というような、諸個体の又様の体験は、しかし、仮面という社会事象のひきあこち、根源的な事態というべきである。仮面は、容貌を変形する。このような操作子 operator をもちこけることによつて、対人的な空間には、いかなる裂開がみられるのであるか? ——この問いにこたへることが、仮面にとつてより中心的な問題だ。

仮面という操作子が出現するのは、平素人々の織りなす対人的情

沢のあり方——客観的世界——が、おどに一種の緊縛と化してあり、そこから社会空間をばある仕方で飛越させることが求められている。自分である、といわなければならないだろう。仮面をもちこむことによつて、社会空間にある飛越を与えることができるのだとすれば、それはどうしてか？——それは、仮面が、単に容貌を変形させたりするからではなくて、仮面が、諸個体の現実性 reality を変容させてしまうから、である。こゝには、いってみれば、仮面の有する断層効果ということになる。こうした効果にもとづいて、社会に聖/俗的な対照が生みだされる、と言つてもよいが、その逆（すなわち、聖/俗の対照がまがみ、仮面が聖なるものの標識をわりあつていく）のことはない。

仮面をいふことの超越性、仮面の発揮する破壊的な力は、窮極のところ、仮面という操作子が、通常の諷解の構図を覆へてしまうことにもとづく、と考えるべきである。仮面は、世界が2重の現実性のもとにかかるうじてえていたバランスを突きくがしてしまい、現実性の日常的な構成に裂罅をもたらす。客観的世界は、対人的状況に関して日常的に成立する唯物論的リアリティに相当するものであるが、仮面は、これに對して、当初から、実在的な顔の対応していない容貌なのであり、それゆゑにかすつて、どのような個体の容貌をも奪つて、その個体にとりつかぬない容貌なのである。（仮面に、憑きものとしての魔力が宿つていゝ、という、よくある俗信には、こうした仮面の危険性が根拠にあつていゝ、とみきりめねばならない。）このような仮面は、客観的世界の恣意性を暴くものだが、と言えよう。ここで恣意性といふのは、どんな容貌でも仮面のように勝手につくりだすことができる、ということを示してゐるのではなく、およそ客観的世界が各人に強いてゐるような必然性の加き、おどに疑ひうるものではないが、という懐疑（いや、むしろ、確信）のようなものだ。

客観的世界としてとらえれば、対人的状況は、どう映るか？
この客観的世界は、そこに、いかなる中心も、特異存在も含まない

平坦さにおいて、一種の平等主義を、実現してゐる——各自は、蔽われぬと二重の客観的存在首であることにおいて、いかにも“対等”であるのだから。各自の容貌は、各自をこうした平坦な世界につなぐとめておくための、引き鉤のようにはたつてゐる。人は、こゝに客観を介して、固定され、社会からする一切の規定をうけとるものであるから。個体の容貌は、半ば生いっこのままならぬものであるが、そのような容貌に規定されてゐるしかない、それゆゑの特定のあり方は、存人の偶発的なあり方であるかもしれないのだ。個体が、己の存在と己の容貌との間に、いぢぢるしい距離をおくようになるとしたら、それは、己の存在は目にみえない、という意識となる。それは、己の容貌をばなれて、「真正の」あり方ができる、という空想的な確信が、個体の肩かに秘かに生まれてくるとき、個体は、社会の光のどこか暗部を孕んだことになる。この暗部は、2重の現実性のせめぎあひ、個体の目をほじめた向けさせるだろう。仮面の体験は、個体のこのような暗部を気付かせ、2重の現実性の上に成立つてゐる個体の同一性を、怪しくしてしまふ。

仮面の断層効果とは、客観的世界の自明さを揺り動かしては、その前提である2重の現実性を互いに剝離させようとし、個体と社会との間のいぢぢるしい緊張を演出しようとするところに、発露されてゐる。（ざやくに言つて、仮面をうみだした支那社会は、このような風裁を、その暗部もろともを押しやうとするような、したたかさをすでにそなへてゐる、ということにもなる。）

39

仮面は、容貌に変化を来たすことを通ひ、社会の現実性を切りこすこととする仕方であつた。反対に、人が社会の現実性から離れ去らば、人は容貌を喪つたのである。これを、わたしは、容貌の解体といふ。

N.B. 容貌の解体をめぐりこの論は、あるいは精神医学の必須文献を
充分に参照もしないまま、まとめもの、暫定的な見解とお考えいただけよう。と
に、「破瓜型」という病像が「今日も妥当と見えうるかどうか、確かめたいものが、残念だ。

各個体おのおのが、己いを、容貌的存在者として把握してあり、
そうした諸個体があつるところに、容貌的な世界が成立して
いること、この事実が、いづれこの社会の現実性を構成する。
すなわち、人が社会の現実性をはなれるとき、その容貌もまた、一
連の異変を被り、ついに解体をとげるほかはないように、思われ
る。

容貌の解体というとき、わたしは、畸型、外傷、顔面神経痛、運
動性麻痺やその他の病変にもとづく諸症状のことを、問題にして
いないのは、むしろ、容貌の「異常」感の源泉である
かもしれないが、いかにも顔にかかゆる諸変形であつて、容貌的な
存在者としての個体のふるまいの内実には、(神経症の場合を別とす
れば) なんの関わりもなにもない。むしろ容貌の解体というものは、
ある個体が、己いの現実性を変容させてしまうことにより、自らの
容貌を自らの表出として維持できなくなることを、言っている。

いわゆる精神障壁者を前にするとき、人は、その容貌に何らかの
"異常" 感を経験することが、あるかもしれない。しかし、それら
のすべてを、容貌の解体と結びつけてしまうことは、できないだろ
う。治療環境にうまくなじめないための緊張や、周囲から与えられ
るパリンカに対する反撥が、表情をかたくなにしているというこ
ともある。また、薬物投与の副作用によつて、容貌が実際変化し
てしまつてゐることも、十分考えられる*。しかし、こうした要因
をのぞいたらとリ除けていっても、なおかつあとにのこる不可解さ
があつるとすれば、それはおそらく、破瓜型に代表されるような分
裂症状のもたらす容貌の解体であるのかもしれない。

* 向精神薬、特に、フェニチン系の薬剤を服用した場合の副作用として

パーキンソン症候群(表情が乏しく、音をはたつたようなかたつきになる、等)、筋緊
張異常(眼がつり上がる、舌が出る、等)、運動性マスキング(口をむくむくさ
せるなどの不随意運動)、といった、いわゆる脳体外路症状(中枢神経系障害
の一種)はあらわしやよいことが知られている。(→ 渡田修編『1973: 422 f』)
破瓜病 Hebephrenie の場合、個体は、行為をなす活動性
の水準を、極度にまで縮退させてゆき、身体の能動的な契機を無化
して、外界へとつながる能動と受動の回路をとぎしてしまふ。その
ような外観から、ひと昔前までは、病者の精神状態は"痴呆的"で
ある、とみなされた。しかし、破瓜型の症状群から、病者の「知力
低下」を裏付けるような証拠を、みつけることは、できないであろ
う。病者に欠けているのは、日常の生活を積極的に支える、世界へ
の関心である。すなわち、病者の心的内容は、いかようにでも豊か
でありうる、と考える方が、むしろよさそうである。

破瓜型の病者にみとめられる無表情の極端なありさまは、ゆいゆ
いになにをかしめるのか? 個体が現実性を一切もたなくた、たの
なら、不活動や無表情という破瓜型の症状群はむしろ現れなくて済む
活動性がとどめられないはずである。ただ単なる動物的運行の如
きが観察されることになりそうである。すなわち、破瓜型の不活動
もまた、あぐれ人間的なあり方なのである。では、病者は、どの
ような現実性にもまわいてゐるのか? わたしは、これを、2重の
現実性が単相化してゐる事態とみることができなかつた。と、いふの
ところを考へておこす。

* 唯物論的リアリティと現象学的リアリティとの(潜在的な)乖離
と軌離は、個体が世界を総合的に諒解しようとする、動因を与える
ものだ。世界の現実性が単相化するということは、この乖離と軌離
とをどうしたか、ついでに、軌を一にしてゐる。破瓜型の病者の
心的世界を推しはか、つみるに、末梢神経や中枢神経はもとより、
発症以前に獲得した身体像や身体図式が、とくにそこをわいたと考
えるだけの理由はないだろう。よ、2. 知覚は正常に運行されてゐるの
であろうが、ただ、それらを全体として秩序づける、諒解作用があ

とらく滞留してゐるのだ。諒解がとどこおるなら、2重のリアリティは、互いに分立するともない(というのは、とらりアリティのくいちがいは、諒解に際して、像と逆像とをどうゆりつけるか、という仕方の方がいさめぐるものであるから)。人が諒解をやめしてしまうとして、その理由が、諒解を通じて味わぬねむらな苦悩をのがれるためなのかどうか、知らない、が、そうした個性が自己へとだけ向かう結果、2重の現実性が成立たなくなつて、世界が単相の現実性へ縮退するのなら、2重の現実性どつなぐ自体のくりことしてあった容貌もまた、不要となつてしまうのだ。

もし、容貌が、融然たる個性の内面の表出であるのだとしたら、他者との疏通性が喪なゆい、世界へ積極的に関与することがなくなつたとしても、表情までが消失してしまうとは、思われぬ。空笑をのほか、自発的な表情の変化が、観察されるもよさそうなものである(実際、そうした病像を示す症候群もある)。にもかかわらず、ある場合に、人が容貌を失つてしまうことがあるのは、容貌が他者とともにあるから、他者との関係的な世界のなかであるようなものだからであろう。容貌が、諒解作用の上に成立するのであれば、諒解が滞留するとき、容貌もまた喪なゆいするのである。

このように、人が容貌をうしなう可能性をもっているという事実こそが、逆に、容貌によつて、人がいかに社会的な存在者であるのかを、逆照射している、といつていい。

40

さいごに、容貌の不安について、少しだけ考えておきたい。

人は、容貌的存在者であることにおいて、恒に根づかい不安につきまとわれようとするように、思える。

異貌のものを前にしたときの、生理的反応ともいえるような不安は、誰にも覚えがあるだろう、が、それをここで考えたわけではない。この種の不安は、容貌の知覚像が受けいれがたいものである

ことによつて惹起される、Gestalt的な不安なのであって、自身の存在の中にまぶ根を下ろしてゐるわけはない、ゆえに、浅い不安なのだ。

他者の容貌を適切につかむ力は、異貌のものを怖れる力と並行して、発達するのである。幼少や小児は、異貌のものたちを排斥することを通じて、容貌的世界としてのこの世界のなりたちを学んでいく。たとえば、福笑い(考えこみいば、こいほど残酷な笑いもゆらいだるう)が、そうである、また、「化けもの」に好む恐怖と好きとにとりつかれる、というのも、この時期にはありがちのことだ。しかし、こうしたおそいば、とらばど多くもちこさいはしない——成人は、より一層具体的な現実を、おそいようにならるからだ。

ともあれ、異貌のものを排斥する作用は、容貌的世界の親和力をたかめるように、はたらく。

ゆえにが二で考えた不安とは、この容貌的世界のなかで人がみまゆい不安である。異貌のものたちからのがけるようにして結束したはなの、容貌的世界が、平安ではなく不安を喚びだましてしまふとすれば、それはどうして存のか?

人は、己の容貌を受容し、容貌的世界の一員として生きることにおいて、社会の現実性に、己を繋留してゐることをのべた。日常的な見方は、人は、この容貌によつて、誰と認められ、己の同一性を知らしめられようのだ、と書いていい。

しかるに、この容貌は、己の表現行為にともがき、とら自身の形態において存してゐるようなものである、ゆえに。人は、もっとまじ存在方、おとゆら、己が形態を定立できるような能動的営為によつて、自らを確証しよう、と考へるがもしいぬ。とらば、向うかの行為であつてもいいし、言葉をはなすことであつてもいい。とらば、固有の形式をとらえてゐるので、表現として自立でき、とらに自らを定立に表現することが出来るもののように、思ひなさい。この仕方と、表現自としての自己同一性の確証、とよんでおこう。

しかしながら、行為やその集積である為事のなかに、あるいは、言表やその集積である思想のなかに、人が己の同一性を実現するとしても、人は、必ずしも、客観的世界から脱脚したところ、その同一性を築き立てている、とは言えない。各自の為事は、(無名のままに安らうのではないとしたら)各自の固有名によって相互に区別されるしかないのである。ところで、この固有名は、また、各自の客観的な同一性をさししめすものであるのだ。——かくして、人は、社会のなかで己の位置をたしがめ、己が何者であるかを知ろうとするには、客観的世界の与える客観的な自己同一性の圏域を、脱脚することにはできないのである。

客観的世界が与える同一性は、基本的には、相対的な(ないし消極的な)ものである。その同一性は、自他が互いに区別し、そのことにおいて互いに支えあうところに、成立する。このような同一性は、つねに過ぎの不安につきまとい、と云えるだろう——

(i) 客観的世界の与える同一性は、自己の本来的同一性と、無縁なものではないだろうか？

客観的世界は、社会の現実性から離反しようとする個体の暗部を溶解させることができない。かえって、客観的な自己が、空虚な脱け殻であるかのように、考えらるるがもしいぬ。それゆえ、己の客観とのあいだに、大きな距離を感じてしまう場合には、かえって、

(ii) 己の客観が、ある日、ついに己から剥落してしまうのではないか？

という不安が、頭をもたげてくるだろう。これらの不安を、客観的世界は、いかんとも癒しがたいのである。

41

以上で、客観に関するわたしの寸さやかな究明の試みを、ひとまふしゆる。ここまでの作業は、問題を解決するというよりも、むしろ、

る、多くの問題を掘りおこしかけたまま、つみ残してしまつた。のちの論考で、これらのうちどれ程を回収できるか、心算ないが、それでも、この本論が、わたしかあるいはほかの誰かがこれらの問いをさらに考えずめる上で、いささかの足がかりと与えることになつたのであるなら、大いに満足するべきなのだろう。

(了 — 本文110枚)

(文献)

- 藤嶋 昭 1974 「精神分裂性精神病者と自画像」宮本忠雄編『今裂病の精神病理』2:219-242. 東京大学出版会。
- 浜田 晋他 (eds.) 1973 『精神医学と看護 — 症例を通して —』日本看護協会出版会。
- 藤爪大三郎 1976 「メガネの三角形 — 日常の記号学 —」。(未発表)
- 原文雄 1978 「顔グラフによるコミュニケーション — 基礎から人間への情報伝達 —」『自然』390:26-35。
- Leroi-Gourhan, André 1964-1965 Le geste et la parole Editions Albin Michel 荒木亨訳『身振りと言葉』1973 新潮社。
- Lévi-Strauss, Claude 1975 La voie des masques Editions d'art Albert Skira 山口昌男・渡辺宗章訳『仮面の道』1977 新潮社。
- Liggett, John 1974 The Human Face Constable & Co. 山本明・池村太郎訳『人相 — 顔の人間学 —』1977. 平凡社。
- 坂部 恵 1976 『仮面の解剖学』. 東京大学出版会。
- Wittgenstein, Ludwig 1921 Logisch-philosophische Abhandlung 藤本隆志・坂井秀森訳『論理哲学論考』1968 法政大学出版局。

CN 69 Hashizume, Daisaburo

completed 1978-8-23
1st print 1978-8-28